川添睡です。

本日は 私が日常に対して利用している3つの態度について紹介したいと思います。

それは私の態度の3つの側面と言う方が近いのですが、

その中でとくに伝えたいものは「クィアする」という態度についてです。

これは「ずらす」とか「台なしにする」という行為や現象ですが、

今回皆さんと「クィアする事」を考える中で、

障害の分野の運動や学問の場でも

既に「クィアらしさ」が存在していた、存在している

ことを感じ取ってもらえると思います。

そして順番が逆になりましたが、この「クィア」が起きる場として新しく

当事者研究というものの可能性を紹介したいと思います。

そうやって、障害学、当事者研究、「クィアする」

この3つの態度あるいは目線をまぜこぜにすることを、

今回私は「自閉的にクィアする」と呼んでみます。

私は自閉者として「自閉的にクィアする研究」をやりたいと考えます。

私は大人になって「発達障害」というラベル付けを経験している人です。

私の今の関心は、一言でいえば

社会と私の間のバランスをとる方法についてです。

今私は日常でどんなことが起こっているのかを解釈するとき、

大きく3つの視点に依存しています。

一つ目は 運動とそこから生じた知見、物の見方の蓄積です。

これは障害学がそうですし、

それ以外の様々な分野の運動からもそうで

それらは相互に関わり合っています。

これは自分を否定的にとらえない考えかたとして

とても大切に使っていますが、

それと同じ位に助けられているものがあります。

それが当事者研究の研究する・弱さでつながるという態度、

そしてクィアするという態度です。

順番に説明します。

私は当事者研究のミーティングによく行きます。

この発表で使う当事者研究という言葉は、

「べてるの家からムーブメントが生じた自己研究形式のミーティング」くらいの意味です。

私がいる会はべてるではありませんが、

そこで大事にしていることは

人とその人の問題を分けることです。

一方、身体の感覚や認知に焦点を当てて

それをその人自身の言葉で丁寧に追っていく作業でもあります。

私は先ほど当事者研究の意義を「態度」と呼びました。

これは当事者研究をする人の間で時々聞く言葉です。

「研究する」という態度で日常と向かい合うこと自体が

生きる上で大きな助けになっています。

どんな雰囲気で研究しているのかを伝えるために、

今から私の自己紹介をちょっとだけしてみたいと思います。

「停滞に生きる私」とつけてみました。

私は自分のことを「停滞の中に生きる人」みたいにとらえています。

私は1年前に引っ越しをした時に冷蔵庫や洗濯機を買いましたが

それ以来まともに家具とか家電とかを買い足していません。

というよりも もっと小さな日用品とかもあまり補充しないし、

逆に古くなってよれてきた物も捨てません。

私は自分の部屋にいるときは、希望としては

時が止まったかのようにずうっと停滞した空気にみたされて

毎日を過ごしていたいなあ、みたいなスタンスで生きています。

普通の言葉で言うと、私の部屋は「散らかっている」と呼ぶのかもしれませんが

これは「私の部屋**が**、私の停滞についてこれてきていない」状態だと思われます。

もし部屋が私に連動出来ているなら、停滞した部屋はきれいなままのはずです。

だから私は「私の部屋を停滞させる方法」の研究もしています。

さて、当事者研究はこういう「ひねった」言い方ばかりする

という訳でもないのですが、

今の雰囲気を頭の片隅に置きながら

次の「クィア」の話を聞いてみてください。

さて、最後の姿勢「クィア」です。

クィアというのは性的少数者の運動から出た言葉です。

今回私がとりあげるのは態度なので

「クィアする」という動詞の方となります。

これはひねるとか台なしにするという意味なのですが、

今まで多くの人が当然だと思っていた何かに対して

「全然当然ではなかったんじゃないの?」という事をあからさまにしてしまったり、

これまで毎日私たちが行ってきた行為やふるまいの

意味自体がずれて新しくされてしまう事です。

そしてこういうことは、障害学の分野でも

すでにその感性があるはずです。

青い芝の会の行動綱領で

「われらは、愛と正義を否定する。」と宣言された事に私はそれを感じますし、

「われらは、問題解決の路を選ばない。」にもそうです。

私は「クィアとは何か」という事に対して

いつもすごく説明できなさを感じていますが、

マサキチトセさんの文章からそのエッセンスを感じたので引用してみます。

「クィアする・台なしにする」という行為は、

自己がのっかっている「台」も「台なし」にしてしまう行為なわけです。

「おもいがけず、その場の なにかがクィアされてしまう」事態というのは、

おそらく だれにとっても、たのしいものでは ありません。

「自分のよってたつ台をも、台なしにする」——

「クィア」という動詞のもつ、この諸刃の剣、というか、

さしちがえ覚悟みたいな いきごみを おもいだすことで

私はこの「クィアする」という態度やクィアされた事柄を大切にして

自分の研究や当事者研究をしたいと思っています。

3つの態度を私の中でより合わせたものを

「自閉的にクィアする」と呼んでみます。

自閉的にとつけたのは、

自分がひとまずどの立場から規範をずらそうとしているのかを

自覚しておくことが大切だと考えるからです。

だから、私は「文化としての自閉者である私」を起点にします

つまり私自身の考え方のパターン、物事のとらえ方、身体の感覚

そこを元にして考えを組み立てます、そういう意味です。

具体的な例として、2014年に大澤博隆さんが開発したAgencyGlassを取り上げて考えます。

スライドの写真はAFPの取材記事

「感情コントロールが不要になる眼鏡型装置、日本の科学者が開発」から引用しました。

AgencyGlassは眼鏡の形をしていますが、

レンズに相当する部分が液晶板になっていて、

そこから予め撮影しておいた自分の目元の映像を

外側に向かって映し出すことができます。

これは目を見開いたり視線を合わせたりするパターンを映し出せるので、

モードに合わせ最適な表情を演出できます。

たとえ着けている本人が寝ていても可能です。

大澤さんは開発した意図として、

「労働者に対して心理的なストレスを与える感情労働というものを代替したかった」

という事を書いています。

さてどうでしょうか。私は実物を見ていませんが、すごくいいなあと思いました。

というのは「これまでの表情を使ってやり取りしてきたコミュニケーション」に対して

色々な事をバカバカしいと思わされてしまったからです。

予め言っておきますが、

私はAgencyGlassでコミュニケーションの障害を回避できるとか、

そういう可能性を見ているわけではありません。

補う技術をいくら発展させようと、健常中心主義は揺らぎません。

これがもたらすのはコミュニケーションの新しい未来ではなく、

むしろ過去と現在のコミュニケーションに対する別の見方の可能性です。

たとえば、

「表情は「**私が**あなたへどう振る舞うのか」という問題として語られてきたけど、

要するに「**あなたが**私から何を読み取ったか」という問題でしょう?」

と、ボールを投げ返された気持ちになります。

また大澤さんは「感情労働」という言葉を出していますが、そこから発展させると、

ああ、もし私が失業したとしても、感情労働者としては無期雇用されていたんだ。

労働だったら、例えば掃除や洗濯は機械でまかなっていいんだから、

感情労働だって家電を使えば手抜きができるかも?という展望が開けます。

そう言うやる気のないことを言うと、たとえば

「障害者は純粋な心を持っているから障害をのり超えて魂の交流をしたい」

みたいな事を言う人にとっては

いろいろとストーリーが台なしに感じられてしまうかもしれませんね。

これもまたクィアがひとつ起きたと言えるかもしれません。

まとめます。

私は「自閉的にクィアする研究」を試みます。

1つ目は研究する場で、そして当事者研究する場で

「クィアすること」、「クィアされた」観点に着目します。

それは, どちらかというと「個人的なこと」に近いとみなされていた当事者研究と

「社会的な普遍性」にも着目してきた障害学の視座を

対等な力関係でつないでいくポイントのひとつになりえると思います。

もう1つは、「今ある研究というものの有り方自体についてをクィアする」試みです。

問いとして表現するとすれば、こうです。

いままで「研究」で当然とされていた規範は本当にそうでしょうか?

例えば、それを自閉者である私に

より無理のない方向に変えるようなことは可能でしょうか?

「研究」という言葉が今意味している範囲は “ずらす”ことができるのでしょうか?

そして、もしずらした時に「台なしにされてしまう」ことがあるのだとしたら、

それは実はどんなことなのでしょうか?

「自閉的にクィアする」試みとは、クィアすること・クィアな視点を通じて

覇権が機能する構造をダメにする、不具にする可能性を探すことです。

それによって、組織やコミュニティーに多様性が持ち込まれたとき、

その様な場は脆弱さを豊かにするだろう, そう考えています。

ありがとうございました。

(3739字)